

---

海へ.....

sana

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

海へ……

### 【著者名】

N4482A

### 【作者名】

s a n a

### 【あらすじ】

海を舞台にした、ラブストーリー…。ふと海に行つた晃<sup>コウ</sup>と瑠依<sup>ルイ</sup>の物語。一人の行き着く先には、何がある?

## act・1 出会い

『全ての生命は海から生まれた』と聞いたことがある。

確かに海を眺めていると何故か安心する。

途切れることのない波。ほのかにする潮の香り。ずっと見ていても、飽きることがない。

一人で見ている海と、一人で見る海は何かが違う。何が違うか、言えないけど違和感がある。

そして、今は一人。この間まで一人だったのに…なんでこんなに寂しいんだろう。一人でいることには慣れていたハズなのに。君が…琉依が居ないことで、こんなに寂しいなんて初めて知ったよ。

琉依と会つたのは、ここ…海だった。俺がふと海を見たくなり、砂浜で寝ていた。すると、いきなり犬が俺の腹の上に乗ってきた。

「は? 何…この犬…?」

「すいませーん。犬、捕まえててもらえませんかー?」

遠くから女の声がした。言われた通りに、腹の上にいる犬を抱きかかえる。小型? 中型? まあ、大型じゃないから良かった…。犬を抱きかかえ、女がいる方へと俺は歩き出す。女は走っているみたいだ。

「すみません。ありがとうございます。」

「別にいいけど…。危ないよ、離しちゃ。」

でも犬は嫌いじゃないし、むしろ好きな方だし。なんて言うか目が

かわいんだよね。そして、犬の飼い主の女は首輪にリードをつける。  
それを確認した俺は、犬を砂浜に下ろした。

「じゃあ、俺はこれで…」

すると、犬が俺の足に飛びついてきた。尾を毎一杯振っている。

「俺はこれでサヨナラだよ。」

犬の頭を撫でて、帰ろうとしたとき…また足に…。

「本当にすみません。さっきのお礼とお詫びと、言っちゃなんですが、あのお店に行きません?」

女が指をさした場所は、海岸沿いにある小さな喫茶店だった。

## act 2 . 名前

「あんま持ち合わせてないで下さい……」

「あの店、父がやつてこる。あたしの奢つです。」

「でも、悪いですよ……」

ただ海に来ただけだしさ……むづ帰らひつて想ひだし。

「パーヒーだけでも……つてあたし、散歩しに来たんだー。びいしょ……」

「

笑顔になつたと思えば、いきなり悲しそうな顔して……おもしろい女……。

「いこよ。俺、先行つてゐからだ。後から来てよ。」

「はーーー！」

また笑顔になつてる。やつぱぱおもじりこ女だわ。一緒にいたら、飽きなじだらうな。

でも、ここつのは俺から離れようといしない……。俺、ここから動けなこじやん。ビーフショウ……。あ、ここ」と思ついた！

「ビーフショウ……。」

女がつづぶやく。俺はれつて思つてついた事を話してみる「とこした。

「あのせ、俺も一緒に犬の散歩していいかな？離れてくれないし。  
「本当にすみません。良こ案だと思つますよー。」

俺と女と犬で、この砂浜を海を見ながら散歩をすることに。俺と女に会わせるために、ゆっくりと歩く。こんなにゆっくりと歩いたのは久しぶりだ。

「名前は？」

俺がいきなり聞いたから、女はビックリした後にゆっくりと口を開いた。

「董つて言います。」

「へえー、君の名前董つて言つんだ。」

「え？あ、私の名前は違います。董は、犬の名前なんですよ…。ごめんなさい。」

俺も明らかに悪いよな…。いきなり『名前は？』なんて聞いちやつたし。さつきから謝らせてばっかりだし。せりんと聞かなきやいけないよな。

「君の名前は？」

よし、きちんと聞けた。って、なんでこんな事で喜んでるんだ？まあ、いつか。君つて呼ぶより、名前で呼びたいしね。

「瑠依つて言います。」

瑠依：顔と合ひてるじゃん。これでやっと名前で呼べると喜つたら、スッキリするね。

## act3・年齢

「あ、歳はいくつ?」

「まだ17歳です。」

「俺は20歳で、名前は晃。<sup>コウ</sup>」

「年上なんですね。」

「あ、やべっ…氣を遣わせちゃうかも…。でも年齢を誤魔化したくないしね。」

「でも、よく未成年に見られるけどね。」

「私から見たら、同級生より十分大人っぽいですよー。」

「…ありがと。」

久しぶりに?大人っぽいなんて言われた。大人っぽい…ってか、一応成人してるんですけど。まあ、いつか。

「いつもここ散歩してるの?」

「はい!」

まだ敬語使ってるし。いつになつたら止めてくれるんだ?俺が年上だからか。友達と話してる感覚でいいのに。

「可愛いね、董。」

「うん。あたしが一眼惚れして買った犬だからね。この毛の色も好き。だけど、一番愛くるしいのは田だね。」

おっと、犬の話をしたら敬語がなくなつた。俺と同じこと行つてる

しね。この調子で話をしていくつと…。一緒に居て飽きないしね、瑠依は。でも、今日だけだよな。名前を知っていても、今日で最後だよな。

「もうそろそろ着くよ。

「あそこだつけ?」

うる覚えで、瑠依が言っていた店を指さした。確かに…あのレトロっぽい所でいいんだよな?

「そう、あそこだよ。」

すっかり馴染んでるね、敬語なしに。犬の董は瑠依の歩く速さに合わせていて、俺も一人の早さに合わせる。一人と一匹の間には、ゆっくりとした時間が流れる。太陽は沈みかけていて、空を紅く照らしている。

「寒くない? 大丈夫?」

さっきまで暖かかったのに、日が沈むにつれ砂の温度が下がっていく。風も少し強くなってきた。すぐ帰るつもりで薄着で来たために、俺が少し寒かつた。

「大丈夫。慣れてるから。」

店の近くには低い防波堤があり、その防波堤には砂浜とを行き来するための階段が付けられている。

瑠依は董を抱え、階段を登る。俺もそれに続いて登る。上がりきったと思ったら、少しだけ降りる。すると、店の前で瑠依が待っていたよな。

た。

「晃さん、先に入つて。」

「瑠依はどこ行くの?」

とつさに名前を呼んでしまう。本当は『けやん』つて付けようと思つていたのに。でも、瑠依は少し驚いた様子を見せたがすぐに答えた。

「裏から入つて、董を家の中に置いてくるから、適当に座つてて。」

「おー、わかつた。」

瑠依が裏に行つたのを確認すると、俺は店の中へ入つた。

「いらっしゃい。」

マスターがいた。瑠依の父親なんだろうか…。何処に座つていいのかわからなかつたために、カウンターに座つた。

「何にしますか?」

水の入つたコップを俺の前に差し出しながら、俺に聞いてきた。

「ホットコーヒーを。」

「わかりました。」

きちんと豆からひいてるみたいた。瑠依が来ないために、俺は店内をキヨロキヨロと見渡した。

「どうしましたか?」

マスターが俺に問う。

## act4・犬の毛

「え、いや……何でもないっす。」

怪しいと思われちゃったかな…。初めて入ったし、瑠依のお誘いだし断る理由もなかつた…。

お店の雰囲気は、マスターの人柄がでている内装だった。

「晃さん、遅くなつてごめんなさい…」

「ゆっくりでも良かったのに。」

瑠依が店の奥から飛び出てきた。肩で息をしてくる。

「いひ、お客様なんだぞ!」

「マスター、別に気にしてないんで。」

「ついでいうか、晃さんはあたしの客なのーお父さんは黙つててよー。」

少し怒り気味に言つ瑠依。可愛いな、こんなくだらない事で怒つて。遅れただいたいの理由はわかるよ、その様子じや。

「董と遊んでたつしょ?」

少し笑いながら聞いた。だって、マスターに必死に抵抗?してるし…、笑うよ。

「なんでわかるの?」

やつぱ、おもしろこわ瑠依って。自分の服に毛付いてあるの、気付

いてないんだね。

「だつて、服に董の毛付いてるもん。」

「あ、ホントだ。取つてくる!」

また店の奥に戻つた。笑いを堪えきれずに吹き出しちゃった。

「マジ笑うし!面白すぎだから!」

マスターは俺を見て笑っていた。そして、話かけてきた。

「瑠依の友だちかい?」

友だちなんだらうか…知り合い?たつき知り合つたばかり。なんと  
言えばいいんだ?

「まあ、そんなところです。」

「良かつた…。」

良かつたつて何?少しその言葉が気にかかつた。

「お待たせ。」

10分ぐらいで帰つてきた。俺はマスターに入れてもらつたコーヒー  
に、砂糖を入れて混ぜながら答える。

「きちんと全部取つた?」

そして、少しだけ口に含む。口中には、コーヒーの苦みと砂糖の  
甘い味が広がる。美味しいコーヒーだ…。

「取つてきた…はず。」

「うん、取れてるよ。」

笑顔になる瑠依。喜怒哀楽がハッキリしているよね。分かりやすくて良いけど。

すると、俺の携帯が鳴る。電話の着信…彼女からだ。

## act5・カクテル

「「めん。」

マスターと瑠依に断り、電話に出る。

『もしもし。』

『何時頃、帰つてくれる?』

『九時頃。』

『わかった。』

そして、電話を切る。あ…今日家に来るって言つてたんだっけ?いや、どうせ別れようつて思つてたところだし。でも、帰らなきや後で説明するのも面倒だ…。早めに帰るか。

「早めに帰つてあげれば?」

瑠依が遠慮がちに言つ。

「俺が好きで付いてきたんだし、大丈夫だよ。瑠依が気にすんな」と  
ないからさ。」

「そう?」

「うん。」

「気にすんな…? 瑠依から誘つたのか? でも付いてきたのは、俺の意  
志だよな…。」

「もう五時になるし、準備するよ。」  
「うん。」

何かをしあげた。メニュー表を変えている。

「何か手伝いましょうか？」

「君はお客様さんだから。」

「じゃあ、何の準備をしているんですか？」

俺は「いそじや」と何かをしている、マスターに聞いかける。マスターは手を動かしながらも、答えてくれた。

「6時からはナイトタイムにするんだよ。家をたまり場にしないで、来て飲むような店にしたいんだ。もちろん持ち込み有りでね。」

「利益が無いんじゃ？」

「いいんだ。お客様さんの喜ぶ顔が見たいだけにはじめたようなものだし。」

すげえいい人だと思った。自分の方に利点が無くても、いつやって場所を提供するんだから。こんな良い店…ないよ。

「マスター、カクテル作れんすか？」

「少しならね。でも、オリジナルは作れないんだ。才能が無くて…。」

「俺、やりましょうか？」

「作れるのかい？」

「はい！」

一応経験はあるんだよね。兄ちゃんが作れって。自分が店作ったからって、俺に頼まれても素人なのにさ…と思いつながら作りましたよ！そしたら、お客様さんが“美味しい”って言ってくれたのが…今の彼女だけ…。で、半年ぐらい作ってたんだよね。

「今日、試しに作ってみない? 6時になつたら、常連の子来るしね。」

「マスターが良いなら作りますよ。」

つてか、実は作りたいカクテルがあるから聞きました、なんて言えないよ。でもそれは内緒にしておいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4482a/>

---

海へ.....

2011年1月21日02時20分発行